

医師の挑戦を活写

素晴らしい行動の記録だ、と言うのが評者の第一印象である。著者は一九八〇年代はじめから、パキスタンとアフガニスタンでハンセン病の治療ならびに無医村における診療を続けてきた医師であり、本書は、彼がこの地域での医療に携わるようになったきっかけから、九八年にパキスタンのペシャワールに総合病院を落成させるまでに至った格闘の記録である。

本書の価値は何よりも、まだハンセン病に悩む人々に医療を施し、そして医師のいない村に何とか医療を普及させることの意義を、日本人の私たちにも納得のいくような形で掲示したことにある。本書を読んでこの中村医師および彼を支えるNGOであるペシャワール会の活動に感謝の念を覚えない読者はほとんどいないであろう。

しかし本書は、そのような高貴な活動の記録でありながら、抜群に面白い読物でもある。パキスタンやアフガニスタンという日本人にはなじみのない土地の事情を個人的体験を通して描く筆者の筆力には並々ならぬものがある。

しかも、中村医師の活動は、数限りない権謀術数の網の目の中で行われてきたのであって、本書には、献身的な活動とともに人間くさい嫉妬や羨望、権力欲の織り成す政治が活写されている。

もちろん、自ら登場人物であるだけに、客観性を装ったノンフィクションではありえない。文字のそこそこに、他の登場人物に対する不満やフラストレーションが現れる。しかし、よい意味で日本の古武士のような著者の筆致は、読者に対して嫌みを与えないさわやかなものである。

